

## 人生を拓いてくれた「珠玉の言葉となみ投稿文」1968年

1968.10.7

- ・ 人間が薄情、忘恩、不正、残忍であり、自己を愛して他人を忘れるのを見て、彼らに対して決しておこらぬことにしよう。彼らはそのように造られているのだ。それが彼らの天性なのだ。それをとやかくいうのは、石が落ちるから、火があがるから、と言って怒るとかわらない。
- ・ 人は時々、自分が一人では頼りないらしい。暗やみ、孤独は彼を不安にし、彼をつまらぬ危惧や無用な恐怖のうちになげ入れる。
- ・ 人生が悲惨なものであるとすれば、それは堪え忍ぶのは苦しいことだ。もしまた、幸福なものだとすれば、それを失うのは恐ろしい。
- ・ 虚飾のベールをはがした人間観
- ・ 自分は幸福な生まれではないと思っている人だって、その友人や近親の幸福によって幸福になるくらいのはできよう。ただ羨みは彼からこの最後の手をうばう。
- ・ 時に人は、自分の欠点を、自らそれを率直に白状することによって匿そうとし、またその評判を緩和しようとする。
- ・ 謙譲とは、上べだけの徳である
- ・ 我々は、我々の幸福を、我々の外に、他人の評判の中に求める。他人は皆おべっか使いで、軽率で、不公平で、羨望、気まぐれ、偏見にみちみちているのを承知なくせに。何というへんなことであろう！
- ・ 皆の人がうぬぼれ男を見ると、あいつはうぬぼれだという、しかし一人としてそう当人に向ってあえていうものはない。だから彼はそうさとらずに死ぬ。
- ・ 人のために、慈善をなすものは善人である。その慈善の為に苦悩するならば、その人は大善人である。
- ・ 人が真に恋するのはただ一遍きり、すなわち初恋だけである。次の恋は、はじめほど無意思的なものでなくなる。
- ・ 永遠に愛してゆこうとしても意のままにならぬ。愛すまいとしたが意のままにならなかったように。
- ・ 人生は短い。もしそれが愉快である時でなければ。だって好いた人と共にすごした時間だけをつなぎあわせてみるならば、幾十年の人生もやっと数ヶ月にすぎなくなってしまうだろーから。
- ・ 大きな財産を作り上げて、さて得る所は何か？我々より前にいた人たちの虚栄と巧知と労苦と出費とをうけたのしむこと、後世の人たちのための労苦に植樹し造営し取得してやる事の他に、いったい何がある。

1968.11.1 しいのみ学園より

- ・ 我々がえらいとか、えらくないとか、成功したとか、しないとか、幸福であるとかは何をもってきめるのであろうか。人間最も尊きものは、真実なるものを求め、永遠なる者を求める誠ではないでしょうか……。
- ・ 愛の精神こそ、人間の底を流れる唯一のものではないでしょうか
- ・ 意志薄弱！それこそ、人間の敵である
- ・ ぶつつの学校の逆を行えば正しい学校のあり方がわかる
- ・ 訓練なき学校は水なき水車のごとし

1968.11.7 黄色い船より

- ・ なんだって慣れなんだ、人生って奴は
- 

**G (豊川YHグループ)一周年と私** なみ 第4号 1968年12月6日発行より

×月 日の日記より

俺は生きて行く事がつまらないものに思えてしょうがない。この世を上手に泳げない為か？自分に愛想がつきた為か？

電車の中でも、歩いている時も、何か心の中に大きな穴があいている様に思えてしょうがない。映画を見ても楽しくない。俺には非常に楽しいという事がない。何故か、何をやっても気乗りがしない。何をやっても深くできない。……悲しいかな……。

上記は、G (豊川YHグループ) 成立以前に書いた日記から拾い出したものです。その頃の私は、日記のように無気力に家から職場までを往復し、時々山へ登り日頃のウップンを晴らす……

そんな事の繰り返しでした。

しかし、Gへ入ってからは、何か生きる為の「活力」が湧いて来たような気がします。この1年ビックリする程、旅へ・山へと行き（イヤ！旅と山に追いまくられたと言った方が正しいかな？）そしてGの活動を通じながら、まだまだ少しではありますが、「何か」を学んだような感じがします。以前のような人生に対する悲愴感は去り、現実の社会を、人生を甘受しようとする気持ちになって来ました。

それは、遊び疲れた為の怠惰みたいに思われるかも知れないですが、私は、それとは違うと思います。その漠然とした「何か」によるもの、それが活力となっているのではないかと思います。この、事多き一年を振り返り、来年はもっとまじめに生きて行けるようになりたい。そして豊川Gの発展、内面の充実の為に皆さんと共に活動して行きたいと思います。

## 豊川YHG機関誌「なみ」表紙



ガリ版でガリガリと原紙を作り、謄写印刷を使い、みんなで印刷した。毎月発行日前に誰かの家へ集まっていた。ガヤガヤと賑やか。手数がかかるからよけいに愛着があったかも知れない。しかし、勝手な、思いつくままの文を、よくも恥じずに投稿したものだ。と今更ながら感心する。これも青春の一頁。



こんなカットも載せていた。